『幸吉の旅』

東京女子高等師範學校教授　岡田　みつ

七

丁度夕方のことで、加藤の家では、豐かな夕食の支度がしてあつた。幸吉と菊孃は、バンと牛乳のお夜食を濟ませて、納屋に行つて、彌平爺さんが、ミルク搾りをしてゐるのを見物してゐた。仕立屋のお千代は、今日終日、加藤のうちへ頼まれて、縫物に來てゐたのだが、思つたより仕事が渉取つたので、ご機嫌がよかつた。お鎌さんの父親の古いマントで、幸吉のヅボンと上衣を取り、その雨合羽から、ジャケットを作り出したのだつたお鎌の父親は、疾くに亡くなつたのだが、加藤家では、物を捨てることが無く、又、滅多に他人に遣りもしないから、古着も、いつかまた、かうして役に立つ事もあるのだつた。

お千代に針を持たせるか、裁物臺をあてがふかすると、そのお饒舌は、止めどがないので、今も夕飯のお馳走になりながら、お千代は辯じ立てゝゐるのだつた。

「お崎さん、別のお皿をくれなくてもいゝよ、このお皿が大方空になつたから、こゝにパイを入れるから。お前さんも、今ぢや大家内だから、洗ひ物が一つでも減る方がいゝ……

彌平さんは、あの子供達を隨分可愛がつてるらしいね。……あんなに、あの子達に付き纏

はれてゐたら、用が遲れるだらうに……鈍い事にかけちやあの人は天下無類だものね。細井彌平ぢやない。オソイ彌平だ。おまけに、あの人のお母さんの家が野呂ッていふ苗字なのさ。野呂の一家の人達と來たら、この田舍まはりで評判の愚圖で、(お崎さん、ありがたう。もう澤山頂戴しました。)野呂宰一郎ッていつた老爺は、とても鈍くてね、職は大工なんだつけれど、自分の家を建てるのに、二十五年かゝッたのだよしかも、たいして大きな家でもないのに……足場が十五年掛かつて居たッてね、屋根も、すつかり葺き終へるまでに、四五度葺いたつて……次のを葺く頃には、始にした方が駄目になつてるッてわけさ。そんなわけで、野呂の爺さん夫婦は、たッた二室で暮らしてゐたよ。立派な手摺はあるけれど、階段が出來てゐなかつたり床板が張つてなかつたりで……だから實、際の話だが、おかみさんが死んだ時に、先づ、入口の戸を付けるまでといつておかみさんの死骸に防腐藥を注射したのだとさ。ずい分費用がかゝるけれど、お金を出すよりは、爺さん、せき立てられる方が、嫌なのだから。もうお茶も澤山)。

鈍いていへば、長老の岸田さんが、こゝの彌平さんの可笑しな話をしなすつたよ。……森ヶ崎に、甚太ッていつて彌平さんに負けない、鈍い人がゐるンだとさ。或る時、閑人が、どこかの店の前で、饒舌つてゐると、丁度、その店から眞ン前に見える山から、彌平さんと甚太が下りてくるのが見えるンだつて……すると、森ヶ崎の連中の誰かゞ、この綠川の方の人にね、彌平と甚太と、山を下りてくる工合で、どつちが、餘計に鈍だか、賭をしやうと言ひ出したのだとさ。……それで、みんなで見てゐると、やがて、彌平さんが、山の麓に大方來たときに、

急に驅け足になつて、トットットッと、かけ降りてしまつたので、みんな、驚いてしまつたのだつて。それから、悶着が起こつてね。森ヶ崎の方ぢや、甚太が、愚圖の大將だといへば、綠川の方ぢや　彌平が、愚圖にかけちやレコードだといつて、騷いでゐるところへ、岸田さんが通りかゝつたもンだから、審判官になつてくれといはれたのさ。岸田さんは、一部始終を聞いて、彌平さんの方が　餘計鈍いつていつて綠川の人に贊成した。すると、森ヶ崎の方では『どうして、さうなるンだ。甚太は、歩いて降りたのに、彌平は　終りの方を走つたぢやないか』つて　承知しない。そこで、岸田さんが、教會でお說教する時みたやうに、大眞面目で、『彌平が驅け出したとすれば、とても無精で足を止めないからだ』と言つたので、「けり」がついたのだつて。(いゝえ。もう何も食べられない。どうも御馳走さま。)

× × × × ×

もう寢る時刻になつて、幸吉は、自分の小さい室で、未來を占ふのだといつて、ひどく複雜つたお呪ひをしてゐた。彌平爺さんが、一體、あうした事を信じる性なので、幸吉に、未來を知る術だといつて、一つ二つ、教へてやつたのだつた。その一つは、次の唄であつた。

「見えた！　見えた！　一とつ星、
　ピカ〳〵光る　ひとつ星
　私の願ひを　きいとくれ。」

幸吉は、夏の夜の薄闇の中で、開いてゐる窓の許で眞劍になつて、この唄を唱つて、自分も菊孃もこのお家に　長く〳〵いつまでも居られますやうにと願つてゐた。

「僕、自分で考へついた占ひをしよう。菊ちやんの淺靴を、指先の方を外へ向けて、窓の閾に載

せておかう。さうしておいて、もう僕たちが、こゝのお家に居られるンなら、神様に、靴の指先を、室の方へ向けて下さいと願はう。それから、僕たち、出て行かなくてはならないのだつたら、靴の向きを、そのまゝにしておいて下さいと言はう。……この靴ちいさくつて動かしいゝから　仕合せだ。それから。彌平爺やに教はつた通りに、「ひとつ星」の唄を四度つゞけざまに、言つて、それから　お祈りをして、それから　聖書の句を　暗誦して、あしたの朝、靴がどつちへ向いてゐるか見やう。」

星の歌の三度目が來ないうちに、幸吉は、口元に希望の微笑を湛へながら、熟睡してしまつた。

その晩　心地よい驟雨があつた。木蔭の多い谷間から、羊齒の茂みから、生れた微風が、干いた草原や金色の刈株の畠の上を渡つて、小一時間ほどの雨をもたらしたのだつた。

次の朝、綠の樹は　生き〳〵として朝日を迎へ一枚々々の木の葉は、悦びに慄へてゐた。「まさ子」の墓石の上に　差し出てゐる林檎の大枝にはボボリンク（小鳥の名）が　一羽止まつて、聲高々と囀つてゐた。幸吉も、『自然』が　呼びかける「お早う」に喚び起こされて、床から跳ね起きて、さて見ると、あら！　不思議！　幸吉の守り神は幸吉のお呪ひを、自分勝手に解釋してしまつた！

實は幸吉の窓の下に、忍冬が　這ひまつはつてゐて、それから出てゐる嫩枝が、幼い手を伸して何がな、つかまるものはと探してゐるのだつた。その中一本、弱々しい風情をしてゐるのが、夜風になぶられた拍子に、窓の閾に、手を屆かせて、菊孃の靴に、懷かしげに、しかも、堅く〳〵絡み付いてゐるのだつた。

八

仕立屋のお千代が、加藤のうちへやつて來て

お鎌に次のやうに言つた。
「私ね、もつと早く、こちらへ上る筈だつたンですが、この四五日忙しくて、足を休める暇もなかつたンです。この前こちらへ上つてから、七軒、別の家へ頼まれていつてゐましたよ。そして、あの子供達の事を、ひとが、いろ／＼言つてゐるのを。私が、まあほんとの事を話してネなんとか　あの子達をしてやつて下さいつて、頼んで置きましたが……男の兒の方を欲しいッていふ人は、一人もないンです。でも……」
　すると、お鎌は、大急ぎで。
「幸吉や、良い子だから、ちよいと走つていつて木屑を少し拾つて來ておくれ。……お千代さん幸吉の前で、誰も貰ひ手がないなンて、言はなくッたッていゝぢやありませんか。あの子だつて、子供並み　に感じがあるものを。」
「あの子ッたら、本を明けて、あんまり、大人しくしてゐるもンだから、傍にゐたのを、私、忘れてしまつたンです。」とお千代は　言譯をいつて、
「私や、氣が弱くて、黄金虫一つだつて踏み潰せないンですから、人の氣を惡るくすることなんかしませんとも。
それはさうとして、今も申したやうに、誰も、あの子を貰はうッて言はないンです。お醫師の奥さんも、女の兒の方なら、誰か着物代を出してくれゝば、食料は、たゞで、引取つてもいゝッて　言ひなさるのです。とにかく、少時試めして御自分とこの　小さい娘さんの友達になれるか、樣子を見てもいゝッて、尤も、その娘さんといふのが、鬼の申し子みたやうで、猩紅熱を煩つてから、なほ不良くておまけに、耳が聾でね。今晩　歸りがけに　菊ちやんを連れて來て上げますといつて來たのですが……お鎌さんあなた世間の人に、あれこれ言はるよりは、着物代位

出した方がいゝンでせう。私は、あの子供達は、御宅の玄關へ　出しぬけにやつて來たンで、あなただッて、お崎さんだッて、まるッきり　知らない子達で、どこから來るのかも分らないンだつて、言つておきましたけれど……

幸吉は、木屑を拾つてゐた。菊孃は、幸吉を見つけて、その方にヨチ〳〵歩いていつて、幸吉の上に乘つてしまつた。それから、「お馬ハイドウ」のやうに、小さな身體を上下に、ゆさぶつて、それから、幸吉の背からまろび降りていくどか幸吉にしがみついた。それを窓から眺めてゐたお崎は、幸吉が、ぼんやりと　勢がない風をしてゐるなと思つた。菊孃が、いくら微笑して、遊び戯れやうとしても、彼は、只すまして菊孃の　珊瑚の首飾を弄つたり、その帽子の紐をキュッと緊くしてやるだけだつた。

お鎌は、いやに澄まして、お千代に、

「いろ〳〵子供達のことで骨を折つて、下すつて御親切に、ありがたう。おまけに、私達の辯護までして下すつて。それで……お醫師の奥さんも、御親切ですけれど、まだ、あゝして、幸吉の方が、うちに居るのに、急に、菊孃を他所へ上げやうとも思ひません。それに、その奥さんの御宅へ行くと、きつと犬と猫みたやうな仲惡る騷ぎが起こつて、御迷惑でせう。あなたのいふ通り、あの子供達は、此の家へ來たのだから良い家に世話をしてやらなくッてはなりません。もう、二三日考へて、この土曜日の晩迄にどう取定めたか、御返事します。

お千代が門を出て去つてしまふと、お鎌は、

「あんな、おせッかいな、おしやべりは、この邊に他にありアしない。もう、二度と、あんな女に縫物を頼むまいと思ふけれど……、でも、頼まないと、なほ大變だから……あら！　バプテス

ト派の牧師さんが、馬車でうちの納屋の方へ行くが、何の用があるンだらう？　お崎や、彌平は、もう歸つて去つたとお言ひ。あ、いはずといゝ。馬をつないで、うちの玄關へ來るらしい。」

「あの牧師さんの顏が　私や、嫌ひで。」とお崎はお鎌の肩越しにのぞいて、「あの人のお說敎よりあの顏がさ。あんな青い瀨戸物みたような眼の人が、牧師になるなんて、間違つてゐる。」といつた。

その牧師……南條といふ――は、いつ洗濯したか、分らないやうな　麻の塵除外套を着た、ひよろ長い人だが、遠慮がちに、腰掛に、腰を下ろして、さて咳拂をして

「エ――　一寸用件で　お伺ひしたのですが……細井彌平さんが、エ――その――可愛相な子供が……エ……お宅へ……その……迷ひ込んで來たが――それを、どこか、他所へ御やりになりたいのだ……といつて、相談に見えたのでした。そこです。御承知の通り、私共では、今は子供が居りません――尤、以前は大勢居つたのですが――家內が細井さんのお話に感心しましてな、（あいにく　今日は　祈禱會の司會をしてゐますので……でなくば、家內が出ますのですが）その風來の子供を一人預かりたいと申すのです。……エ……まあ、申せば、一寸見習ひとでもいふ風にな、……それで、双方の異存がなかつたら、ほんとに貰ひ子にして　と、まあ、いつた工合に。」

お崎は、息を詰めて　聽いてゐた。お鎌は牧師――よしや青瀨戸物みたやうな眼の牧師でも――が引取るといつたら、かうした機會を　取り逃がしはしまい。もし、さうなつたら　どうしやう。と考へてゐた。ところへ、小さい足音が聞こえ、戸がパッと開いて、その『風來の子供達』が　は

いつて來た。菊孃の帽子は、後ろに　ひつくり返り、その金髪は、一本々々、勝手次第な方角に卷き縮れてゐた。そして、菊孃は、人形を眞逆樣にして　その片足でぶら下げてゐた。幸吉の顏の蒼味は、今は、どこへか消えて、その目は、星のやうに輝いてゐた。彼は、息もせわしく、

「小母さん、灰色の鷄ね、あれ卵を產むンだつたの。それてあんなに怒つてゐたのね。今ね、產んでゐるよ。お池の傍の赤楊の木に巢があるの。」といつた。

菊孃が眞似をして、

（トイのチユが、お池のチョバに。）

幸吉が、

「僕たち、お池の傍に坐つてゐたの。菊ちやんたら、お池ン中へ入るンだもの。」

菊孃が、

（キイちやん、中へはいつちやつた。おニンニョ、おべゝヌアしたの。キイちやんヌエなかつたよ。」

幸吉が、

「すこししたら、鷄がね、水を飲みに出て來たの。」

（ミジユ　飲みに。）

「卵を　數へたら、大きなのが十三あつた！」

（オホチナのがジユウチヤン！）

「だもンで、鷄ッたら、それをみんなかくさうとして身を脹らしてゐたよ。」

（トイッたア　タクさうッて、ふく…アーしてたヨ。」

お鎌は、南條氏の方を、ぬすみ見ながら、

「さうかい。それはよかつたね。だが、今御客さんとお話してゐるンだから、お前達は、こゝに居ないでね。鷄にかまつちやいけませんよ。……で、今申さうとてゐたのですが、どうも、御親切樣にありがたうございます。幸吉——男の

兒の名ですが――はあなた方お二人の　御手助けになりませう。あれが近くに居てくれますと私共も仕合せです。身内でも何でもありませんが、多少責任があるやうな氣がしますから。今晩、よく考へまして、明朝御返事いたします。」

「なるほど。分りました。分りました。が、その家内が欲しいと申してますのは、エ　……女の兒の方なので、家内は、男の兒は望みません。女の兒が非常に好きなので、私も　實は　その……女……」

すると、お鎌は、一つの事には　きつぱり心が定まつたらしく、

「奥さんの折角のお望みですが、……お千代婆さんと、うちの彌平と二人で、村中の御家へ、菊嬢を貰へ〳〵つて勸めて歩いたと見えますから今にあちからも、こちからも、あの子を貰はう〳〵つて　いつて來て下さるかもしれません。でも、私としては、あの子は、私が貰つて置きますから、もしか誰か　あなたにお尋ねしましたら、どうぞ、さう仰つて下さいませ。あなた敎會の壇の上から仰つて下すつてもかまひません。お千代婆さんに知らせて置いても結構、間に合ひます。あの子は、こゝへ來たのですから、こゝへ置きます。」

南條さんが歸つてしまつたら、お崎が、

「お鎌さん、あなたは感心な人だ！　このごろ、あなたを少し怨んでゐましたが、みんな取消します。あんな、青瀨戸物みたやうな眼の牧師が「ありがたう」ともいはないで、あの子を連れて行かうとするンですもの！　なんて厚釜しいンだらう！　あの人の奥さんだつて、子供なんか貰はないで、あの塵除けでも洗濯すればいゝに！」

「そんなに、私を賞め立てなくッたッていゝよ。私だッて村中が世話を燒いて、あゝしろ、かう

しろつて　いつたりさ、急に慈善心を起こして菊孃を貰ふッて言ひ出したりしなければ、あの子を引取る氣にならなかッたらうから。この半月といふもの、うるさくつて〳〵。これからは、もう　私をほつて置いてくれるだらうが。……明日は、幸吉を　都會へ連れて行つて、歸つて來てからは、門に錠を下ろして、當分　近所の人を入れない事にする。」

「幸吉を、都會へ連れて行くンですつて？」とお崎は、鋭く、きゝ返した。

「さうですよ。しかも、一刻も早い方が　みんなの爲だ。——幸吉や、そこの戸を閉めて、納屋へいつておいで。お夜食まで入つて來るンぢやない。分つたかい。」

「そして、養育院へ入れようッていふンですか。」

「さうなンだよ。この邊で、あれをやる家はないもの。それはお前だつて分つてゐるだらう。」

「實は、この間から、あなたが　どうなさるかと思つて待つてゐたンですが、かうなつては、私の考をお話しませう。幸吉を私が引取ります。……これから先、末の末まで。これが私の考なのです。」

お鎌は、呆れて　息をはづませた。

「私は本氣で言つてるンです。私は金持ではないけれど、一文なしでもありません。年々、この二十年の間といふもの、貯金をして來ました。何の爲だか。あなたも御存じです。だが、あれは　もう、すつかり緣切れで。それもまあ結構です。してみると、私は、親もなければ子もなし、世界中に、親戚といふものがないンです。だから、誰かを世話してやりたいと思へば、誰に文句をいはれる事はない、自分の勝手です。」

お鎌は、興奮して、

「そんな事、出來るものか。出來ても私がさせな

い！　馬鹿な眞似を、傍に見てゐる　私がさせません。子供が二人も、こゝゐてガタ〳〵やられてたまるものか。」

「だから、二人置けなければ、どうしたらいゝと思ひます？　みんなが欲しがる方の子を　他所へやつて、いらないといふ方を、家へ置くのです。（馬鹿な奴らだ、あの子をいらないなんて！）それが、すべきことなのだと、私は思ひます。一體こんどの事を考へついたのは誰です？　幸吉でせう。菊ちやんを抱いて、あの貧民窟から連れ出したのは誰ですか？　幸吉でせう。危險を冒してあの汚れた魔窟から、罪のない子を救ひ出して、素直に生育つ所へ連れ來やうと氣がついたのは、誰ですか？　幸吉でせう。一體いつ、あの子が　自分の事を言ひました？　たゞの一度もあり　せんよ。幸吉は、そんな子でないンです。そしてあの可愛いゝ、忠實な子は、どんな報いを得てゐます？　たゞ苦勞をしてゐるばかりぢやありませんか。あの子に面と向つて、誰もお前を欲しがるものはない。みんな、菊ちやんを欲しがつてゐるといひます。それでゐて、あの子は神様のやうな、美しい氣象だからこそ。朝から晩まで、繪本の中の天使みたやうに、機嫌よくして、ちつとも、ひねくれないのです。」

お鎌は、お崎の言葉の理に壓せられて、滔々たるその辯舌の鉾先を挫かうともしなかつた。

「そして、世間の人は、一時、菊孃を引取らうつて騒いでゐる、玩具のつもりで。たゞ髪が卷き縮れてゐるから、色が白いから、女の兒だから（女の兒なら、どこがいゝんだ！）ッていふ譯で。そして、幸吉の方は、虫けら同樣に、足の下に踏みにじられてゐるンです！　こんどのこの事に、神樣のお導きがあるのが　あなたに分りませんか。世の中には、奇蹟といふものもありま

すよ。あの子が、どういふわけで、村中の他の家を通りすぎて、こゝの家へ來たのですか。あの子が導かれて來たのではありませんか。人にきくまでもない。聖書を見るまでもない。さうときまつてゐます。あの子は、こゝの家に、食物が澤山ある、大きなガランとした家で、納屋には、貯へものがあり、銀行には預金があり、家内には、たつた　二人淋しい女が　夏は蠅を追ひ、冬は　爐に薪をくべるより　外の用事もない、とどうして知りませう。あの子は、知らないでも、神様が　御存じだつたのです。神様は、私達に「召され選ばれる」といふ機會を與へやうと思し召したのです。だから、私達は、神様のお使者に背を向けて、追ひ出すわけには行きません。神様は、あの二人を　一緒にお置きになる思召です。さもなくて、あんな風に始をなさりはしますまい。」「世間では、私達を情に脆い、馬鹿の一對だつて笑ふだらう。そして、村中の「見もの」になるだらう。」とお鎌は、長い間默つてゐた末に力なくいつた。

「なつたつていゝぢやありませんか。」とお崎は、頑として答へた。「村の人の見ものになれば、また、神様の「見もの」にもなります。……あ、もう言ふ必要はない、私は、決しました。あなたと私が、三十年一緒に暮して、一度も　言ひ爭ひをした事もなく、ずいぶん退屈でしたが、それでも、あなたが　出て行けと仰らない限り、私は、他所へは行きません。私はまだ〳〵働けるから、あの子を引取つて、あの子が一番大事に思つてゐるものゝ傍に置いてやります。もし十四室もあるこの家が狹いとでもいふのなら、幸吉と私は、あの家――私が結婚したら下さると仰つた――へ行きます。――今夜　幸吉が寢る時話してやらう。あの子、この頃、心配して　やつれてゐます。眼玉が　ガラスで出來てゐる人にだつて分るくらゐに。」（つゞく）